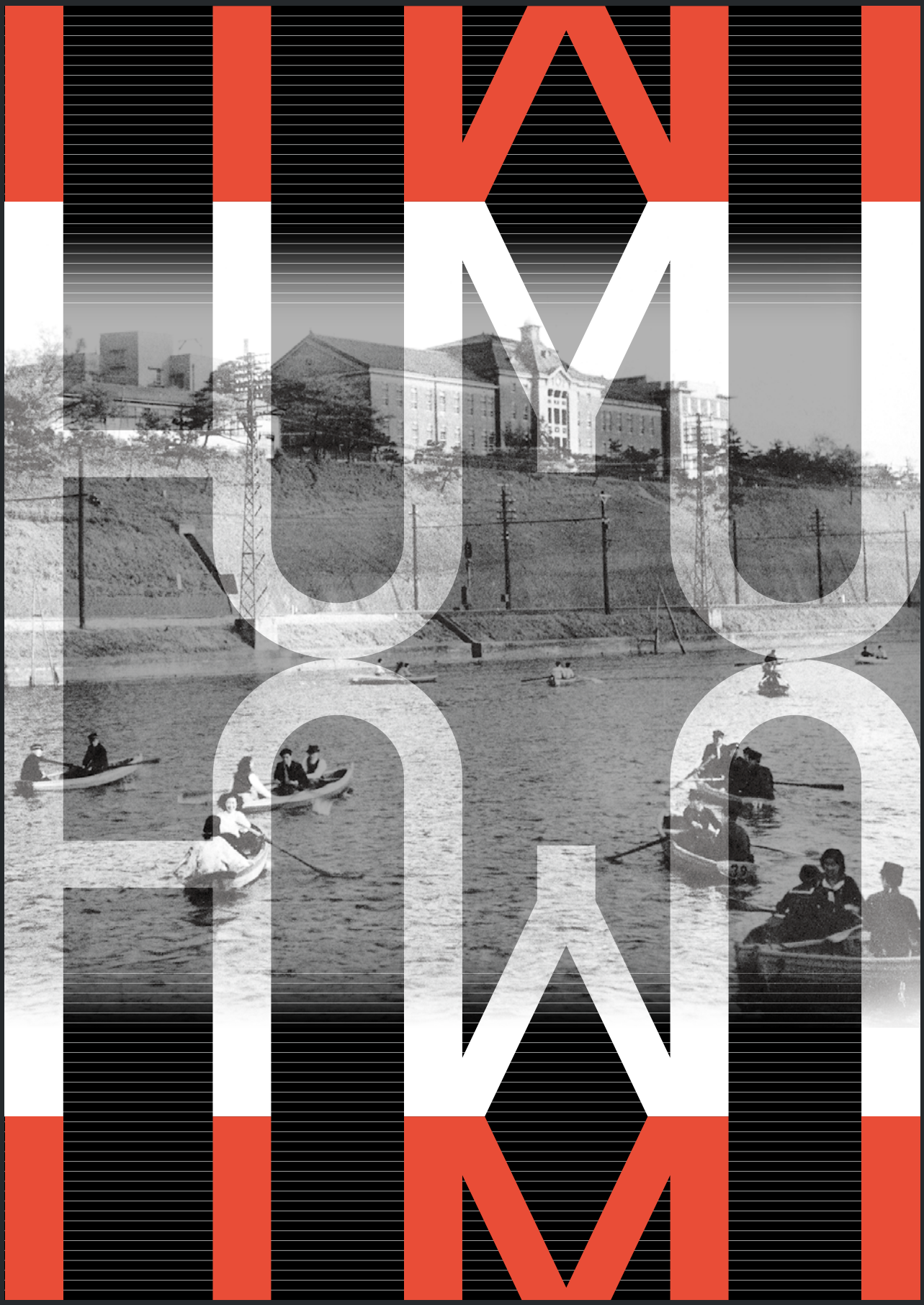
HOSEIミュージアム　2023年度特別展示

都市と大学 ―法政大学から東京を視る

〈増補改訂版〉



凡例

（1） 本冊子〈増補改訂版〉は、2023 年 9 月 1 日～ 30 日を会期として開催された HOSEI ミュージアム 2023 年度特別展示「都市と大学―法政大学から東京を視る」（主催：HOSEI ミュージアム）の展示内容を冊子化したものである。

（2） 本展は、HOSEI ミュージアム開設記念特別展示（2021 年 3 月 8 日～ 4 月 23 日開催）および 2023 年度春学期企画展示（2023 年 5 月 12 日～ 8 月 25 日開催）の内容を再構成したものである。

（3） 第 1 ～ 3、5 章はミュージアム・サテライト市ケ谷（外濠）にて展示された通史篇、第 4 章はボアソナード・タワー 14 階博物館展示室にて展示された大学昇格時の教員と学生の特集、増補部分は HOSEI ミュージアム開設準備募金をもとに制作された第 1 期映像コンテンツに連動する内容に基づく。

映像コンテンツはこちら→

（4） 本冊子の執筆・編集者は以下の通りである。
第 1 ～ 3 章、第 4 章 4 ～ 6、第 5 章、増補：古俣達郎（HOSEI ミュージアム所員　＊ 2021 年当時）
第 4 章 1 ～ 3、増補：北口由望（HOSEI ミュージアム所員）

（5） 本冊子掲載の写真は記載がない限り、HOSEI ミュージアム所蔵である。また、展示資料については一部掲載している。

謝辞

本展の開催に際しまして、下記の皆様には資料の転載をご快諾いただきました。記して感謝申し上げます。

公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所市政専門図書館、
専修大学大学史資料室、中央大学広報室大学史資料課、
獨協学園史資料センター、日本大学広報部広報課、明治大学史資料センター

目次

第１章　東京法学社と「東京」…*5*

1. 江戸から東京へ、法学教育のはじまり ……5
2. 東京で出会った創立者たち ……6
3. 法政大学発祥の地 神田駿河台 ……6
4. 神田学生街の形成 ……7
5. 神田時代の校舎 ……7
6. 「上京遊学」の時代 ……8

第２章　九段の法律学校 …*9*

1. 九段への移転 ……9
2. 九段上校舎の思い出 …… 10
3. 甲武鉄道の敷設 …… 11
4. 文教地区としての九段・飯田町 …… 11
5. 清国留学生と飯田町・神楽坂 …… 12
6. 「アルバイト」としての人力車夫―卒業生三條商太郎の回想― … 12

第３章　法政大学の大学昇格と「大東京」の形成 …*13*

1. 大学昇格と富士見校地の開設 …… 13
2. 拡張する東京 …… 14
3. 中野（新井薬師）の運動場と吉祥寺の法政寮・満州学生寮 …… 15
4. 東京横浜電鉄の開業と木月校地の開発 …… 15

第４章　大学昇格時の教員陣と「法政ボーイ」たち …*16*

1. 法政大学の大学昇格 …… 16
2. 初代学長松室致 …… 17
3. 予科長野上豊一郎の活躍 …… 18
4. 学生文化の開花 …… 19
5. 「法政ボーイ」の時代 …… 19
6. 神楽坂・外濠と法政大学の学生たち …… 20

第５章　戦後法政大学の歩みと３キャンパス時代の幕開け …*21*

1. 市ケ谷キャンパスの再建と 53・55・58 年館の竣工 …… 21
2. 3 キャンパス時代の幕開け …… 22
3. 小金井キャンパスの開設 …… 23
4. 多摩キャンパスの開設 …… 23

増　補 …*24*

1. 「腕力世界」から「法律世界」へ―東京法学社の創立― …… 24
2. 「自由と進歩」の精神―法政大学における学風の形成― …… 26

HOSEIミュージアム
HOSEI UNIVERSITY MUSEUM

ご挨拶

HOSEI ミュージアムが開設された 2020 年、法政大学は創立（1880 年）から 140 周年、大学昇格（1920 年）から 100 周年を迎えました。東京法学社として産声をあげた本学は神田地区の旧武家屋敷や勧工場を転々としながら、日本全土から上京した有為な若者たちに法学教育を施しました。そして、大学昇格の翌年、現在の富士見校地（市ケ谷キャンパス）に根城を構え、都市化の進展、交通網の発達に伴い、東京各地にそのキャンパスを広げていきました。

本展示では、都市空間として発展・変容していった近現代の東京の姿を法政大学の歴史のなかから捉え直すとともに、東京という空間の観点から本学の歴史を再考します。

増補改訂にあたって

HOSEI ミュージアムが 2020 年 4 月開設をめざして準備を進めていたところ、同年 1 月、日本国内で初めて新型コロナウイルス感染例が確認され、瞬く間に全世界に拡散しました。当初の予定を延期し、同年 6 月に学内者限定で開館、10 月に一般に向けて開館しました。準備していた開設記念特別展示「都市と大学―法政大学から東京を視る」も緊急事態宣言下での開催（2021 年 3 ～ 4 月）を余儀なくされ、多くの皆様にご来館いただく機会とはなりませんでした。

今年 5 月、新型コロナウイルス感染症が感染症法上の 5 類感染症に移行し、社会並びに大学における諸活動がようやく本格的に再開したことを機に、改めて「HOSEI ミュージアム開設記念特別展示」をお届けします。

HOSEI ミュージアム ミュージアム・コア（九段北校舎 1 階）

第1章
東京法学社と「東京」

1．江戸から東京へ、法学教育のはじまり

法政大学の起源である東京法学社は、江戸から東京へと移り変わる明治初頭に誕生しました。

明治維新により、明治政府は江戸を東京へと改称、日本の首都と位置づけ（東京奠都）、「郭内」（元は江戸城の外濠の内側の区域を意味する言葉）に政府の機関を次々と設置し、周囲の旧武家地区には、様々な学校が設立されるようになります。

1871（明治4）年には、司法省の設置に伴い、司法省明法寮（後の司法省法学校）が設立され、官による法学教育が開始されました。しかし、その教育対象者が極めて限られていたことから、司法官やボアソナードらお雇い外国人、そして、東京に在住する代言人（現在の弁護士）、民権家などの都市の知識人層が中心となって、私的にも法学教育が行われるようになります。こうして、時代の学問である最先端の法学知を求めて、有為なる若者たちが東京を目指すようになったのです。

宮城（皇居）西側には麹町区、東側には神田区が広がる（『東京全図』1887年）

G.E. ボアソナード（1825-1910）

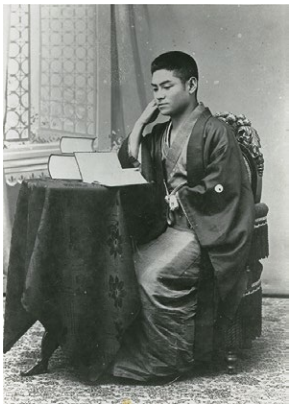
2. 東京で出会った創立者たち

薩埵正邦、伊藤修、金丸鉄の３名によって、法政大学の起源である東京法学社が設立されたのは、1880（明治 13）年４月のことです。創立者３名のうち、薩埵は京都、伊藤・金丸は杵築藩（現在の大分県杵築市）の出身であり、彼ら 20 代の若者たちは最先端の知を求めて、郷里から上京しました。

創立者たちは東京という都市で出会った人々と、出身地・出身藩の違いを超えて、横につながり、横に議論し、独自のネットワークを形成していきます。このようなネットワークをもとに設立されたのが、東京法学社でした。

創立者たちが自らの学校に「東京」を冠したのは、単に所在地の地理的名称を意味するだけでなく、新たな時代を迎えるなかで、「東京」という言葉が当時の若者たちを惹き付ける象徴的な意味を持っていたからではないかと考えられます。

薩埵正邦（1856-1897）

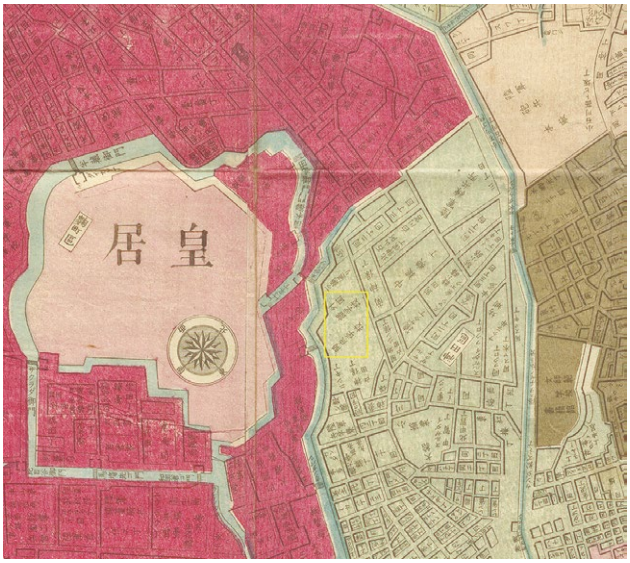

伊藤修（1855-1920）

金丸鉄（1852-1909）

3. 法政大学発祥の地 神田駿河台

東京法学社は神田駿河台北甲賀町 19 番地池田坂上に設立されました。この地は元々、攘夷派の公家であった大原重徳が邸宅を構えていた場所です。設立当時の資料（『明治 13 年 代言人登録名簿』）によると、同地は創立者の一人伊藤修の現住所と一致していますが、例え、借家であったとしても、年若い創立者たちが旧大原邸全体を借りていたとは考えにくく、おそらくその一角を借り受け、そこに東京法学社を開校したのではないかと推測されています。

東京法学社が設立された神田駿河台や錦町、小川町等の旧武家地区および隣接の火除け地では、東京法学社の設立以前にも、1872（明治 5）年開校の開成学校（東京大学の源流の一つ）などの官立学校、依田薫私塾、講法学社（明治大学の前身の一つ）、明法学社、東京攻法館（専修大学の前身の一つ）など法律学校の先駆けとなる私塾・学社（舎）が設立されていました。



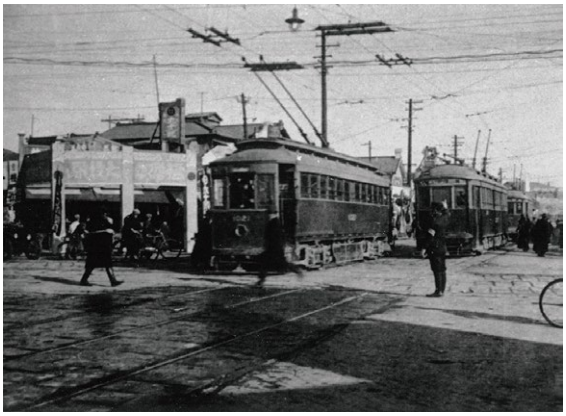
中央に開成学校、外国語学校が見える（『改正東京測量全図』1881 年）

4. 神田学生街の形成

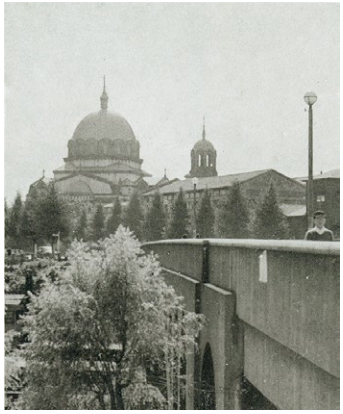
「神田と云えば、直ぐ学生を聯想する」「銀座が紳士の街なら、神保町通りは学生の街だ」（谷崎精二「神保町辺」『大東京繁盛記　山手編』1927 年。谷崎精二は谷崎潤一郎の弟。）、といわれるように、神田地区は古くからの学生街として知られています。

神田学生街は、明治初頭、東京法学社の設立前後から同地区に多くの学校が設立されたことからはじまりました。とりわけ、明治 10 年代以降には、専修学校（現：専修大学）、明治法律学校（現：明治大学）、英吉利法律学校（現：中央大学）などの私立法律学校が同地区に相次いで設立（もしくは移転）され、東京でも有数の下宿が多い街になりました。東京で最初の活動写真（映画）が上映されたのも神田区錦町にあった錦輝館です。

大正期以降も、これらの学校が専門学校から大学へと昇格したことから、関東大震災（1923 年）で多大な被害を受けながらも、より多くの学生たちが集う街となり、「学校と古本屋」（谷崎）で知られる、日本有数の学生街が形成されていったのです。



神保町界隈（1930 年代）

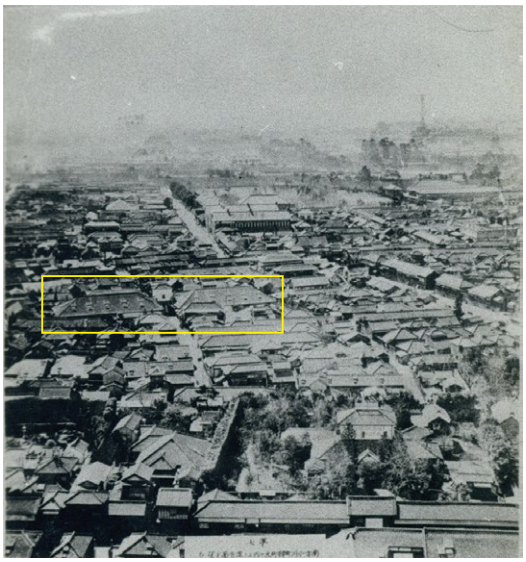


お茶の水界隈のランドマーク、
ニコライ堂

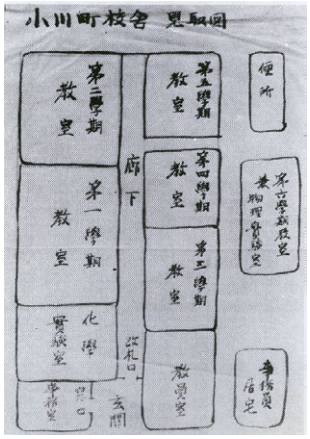
5. 神田時代の校舎

草創期の法政大学は神田地区の駿河台、錦町などの旧武家屋敷を転々とし、授業を行っていました。当時の神田地区には、幕府の崩壊によって、屋敷を構えていた武家や旗本が国元に帰るなどしたために、多くの空き家があったためです。ただし、武家屋敷を利用した校舎は「極手狭なる講堂に三、四十名斗聴講至居候位の事にて微々たるもの」（第一回卒業生戸田敬一郎の回想）であったといいます。

1884（明治 17）年に移転した小川町の校舎は旧勧工場（デパートの前身となった商品陳列場）の煉瓦造の建物で、講堂には約 300 人が収容できるほど大きなものでした。小川町校舎の玄関には大審院院長として活躍した玉乃世履揮毫の「東京法学校」という五文字の額が掲げられ、上京生のための寄宿舎も併設されていました。この校舎はその後、東京物理学校（現：東京理科大学）の校舎として再活用されることになります。



ニコライ堂から見た小川町校舎
（黄枠の建物が東京法学校及び東京仏学校校舎）



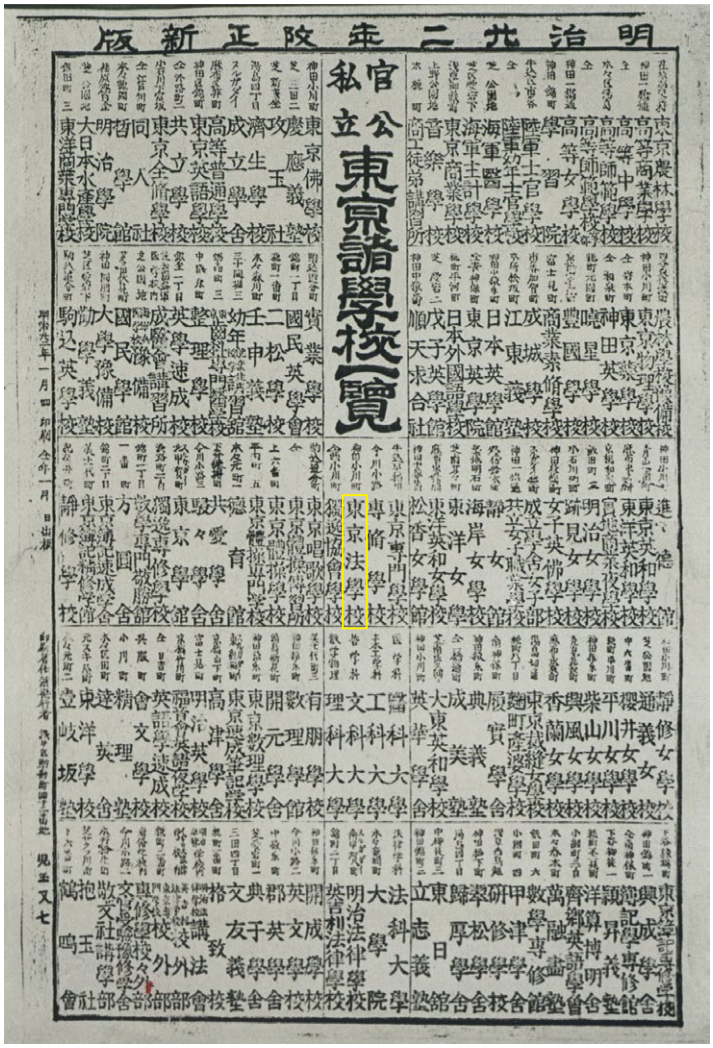
小川町校舎見取り図

6.「上京遊学」の時代

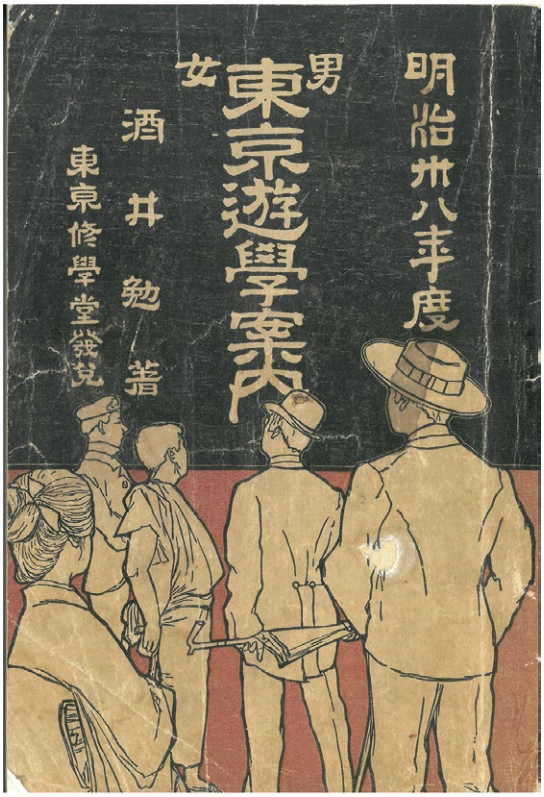
明治 20 年代初頭、明治維新後、減少し続けていた東京の人口が江戸の最盛期人口 130 万人を超え、150 万人に達しました。東京が日本の首都であることが名実ともに確固たる事実となったのです。

同時期には、東京法学校（現：法政大学）、専修学校（現：専修大学）、明治法律学校（現：明治大学）、英吉利法律学校（現：中央大学）、東京専門学校（現：早稲田大学）の 5 校が「五大法律学校」と称され、日本全国から、士族層だけでなく、平民層からも多くの学生たちを集めるようになります。

こうして、「上京遊学」もしくは「東京遊学」と呼ばれる時代が現出することとなります。地方の若者たちは、当時、刊行されていた各種「遊学案内」を読むことによって、東京の学校事情と地理を学び、「遊学案内」を片手に郷里から憧れの東京へと向かいました。



『官公私立東京諸学校一覧』（1889 年）



『明治廿八年度 男女東京遊学案内』表紙

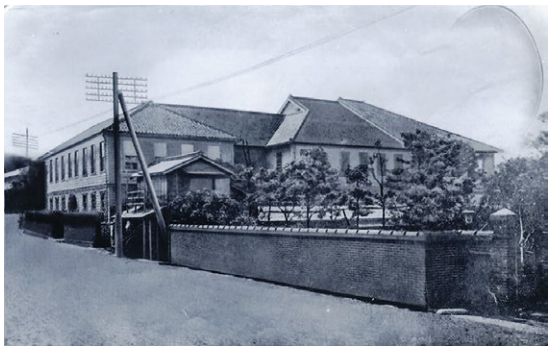
第2章
九段の法律学校

1．九段への移転

1890（明治23）年、東京法学校は和仏法律学校へと改称し、改称とともに神田地区から麹町区九段の地へと移転しました。

九段にはもともと広大な火除け地があり、明治政府による旧火除け地の利活用推進のなかで、東京招魂社（現：靖国神社）が創建され、日本最初期の洋式競馬場（招魂社競馬）が設置されるなど、新興の開発地域でした。九段は雑踏の神田地区と比すれば、いまだ緑豊かな高爽の地であったといえます。

和仏法律学校が九段に移転した理由は学生数の増加による、校舎の狭隘化にありました。もう一つの移転理由として、明治法律学校、英吉利法律学校などライバル校が相次いで壮麗な洋風校舎を新築したことも影響していたのではないかと考えられます（明治法律学校は1886年に有楽町から移転し、神田駿河台に校舎を新築、翌1887年、英吉利法律学校は神田錦町に新校舎を竣工しました）。



九段上校舎

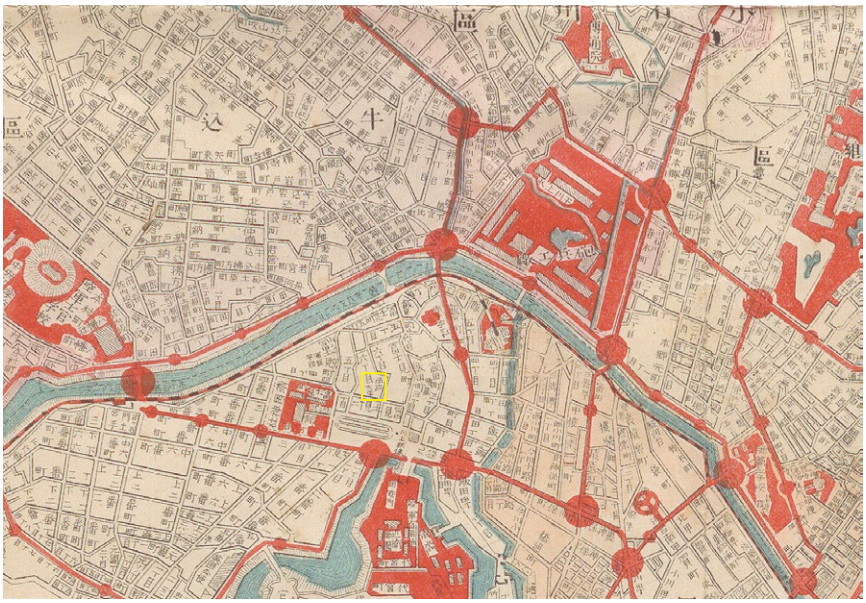
招魂社競馬（『風俗画報 東京名所図会』より。江戸東京研究センター所蔵）

2. 九段上校舎の思い出

東京法学社・東京法学校時代の校舎は旧武家屋敷や勧工場（デパートの前身となった商品陳列場）など既存の建築物を活用したものでしたが、九段の地でははじめて新築校舎（九段上校舎）を竣工し、入学を志望する多くの若者たちの受け入れを開始しました。

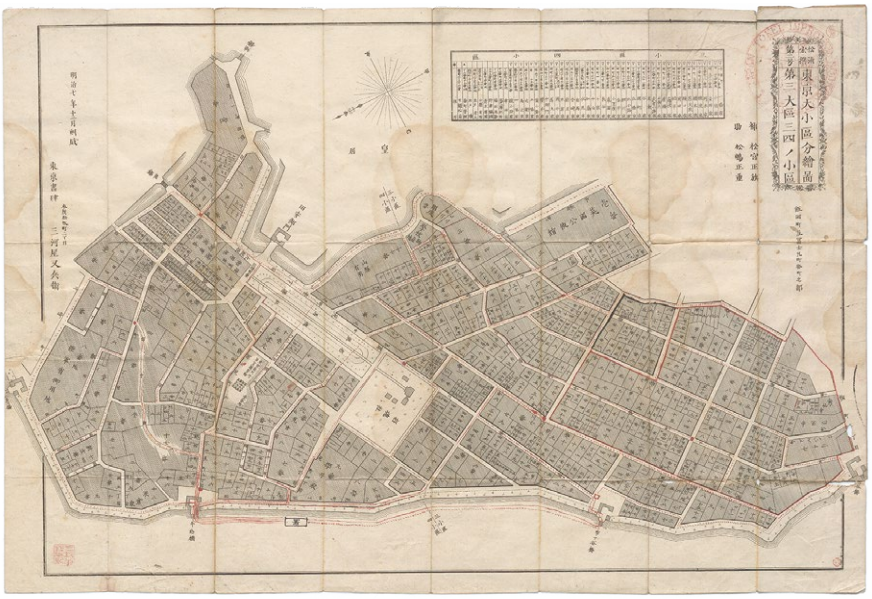
1895（明治 28）年に和仏法律学校を卒業した石井豊七郎（後の長崎控訴院長）の回想によると、「夕刻に真鍮の肉池型の墨壺をブラ下げ水筆を耳に挟んで九段の坂や中坂を上つて行く代言人風の青年は、概ね富士見町の和仏に通ふ学生なのであつた」とのことです。

九段上校舎は日本人学生のみならず、清国（中国）留学生も含めた多くの卒業生を送り出し、1921（大正 10）年、富士見校地（現在の市ケ谷キャンパス）に移転した後、大東文化学院（現：大東文化大学）に譲渡されました。



1903 年、和仏法律学校は法政大学に改称した（『明治四十三年成　実測東京全図　附八王子。青梅』1910 年）

聴講券 和仏法律学校（1903 年） 旧蔵者：古河末虎。「私立法政大学会計局」の印有り。この聴講券が発行される直前の 1903 年 8 月、和仏法律学校は専門学校令による認可を受け、法政大学へと校名を改称した。



『番町一円飯田町及富士見町辺地図』（東京書肆、1874 年） 別タイトル：東京大小区分絵図第二号、第三大区三四ノ小区。選：松浦宏、補：松宮正旗、助：松嶋正重。

3. 甲武鉄道の敷設

JR 中央線の前身である甲武鉄道が開業したのは、1889（明治 22）年のことです。計画当初は馬車鉄道の敷設を予定していましたが、汽車鉄道の建設が各地で始まったことから計画を変更しました。

路面電車（市電）が走っていた頃の市ケ谷駅

飯田町駅と牛込駅が合併し、1928 年に開業した飯田橋駅（竣工時）

外濠沿いに走る中央線（1929 年）

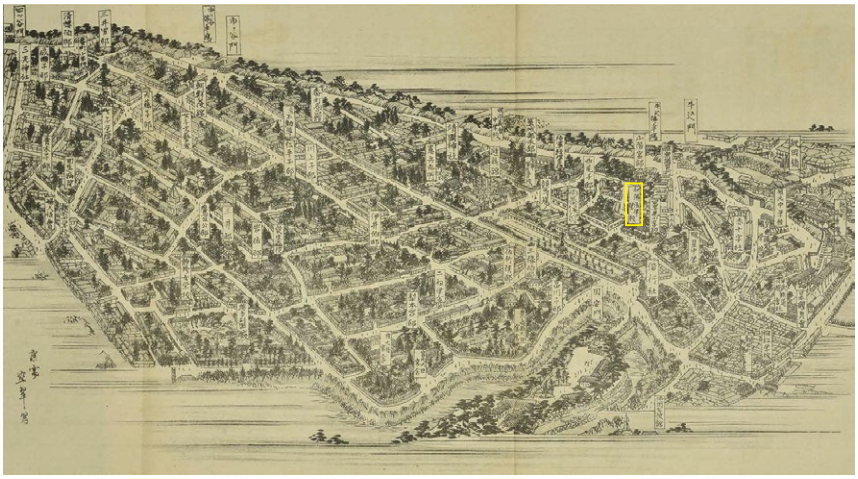
開業当初の路線は新宿－立川間のみでしたが、開業早々に路線の延長を繰り返し、和仏法律学校の九段移転と同年の 1890（明治 23）年には、飯田町－万世橋間の敷設を出願し、明治 20 年代末までに飯田町駅、牛込駅、市ケ谷駅を設置しました。

1904（明治 37）年には、飯田町―中野間で日本の鉄道で初めての電車の運転を開始し、日露戦争後の 1906（明治 39）年には、軍事輸送の効率化や産業構造の重工業に伴う輸送力の強化等を目的に私鉄の国有化を促進する、「鉄道国有法」が制定され、同法によって買収・国有化されました。

4. 文教地区としての九段・飯田町

明治期を通じて、九段･飯田町地区では、和仏法律学校（法政大学）だけでなく、東京物理学講習所（1881 年設立。現：東京理科大学）、皇典講究所（1882 年設立。現：國學院大學）、日本法律学校（1889 年設立。現：日本大学。皇典講究所校舎にて夜間開講）、暁星学校（1890 年移転。現：暁星中学校・高等学校）、徳川育英会育英黌農業科（1891 年設立。現：東京農業大学）、東京女医学校（1900 年設立。現：東京女子医科大学）、私立共立歯科医学校（1907 年設立。現：日本歯科大学）などの学校が校舎を構え、文教地区が形成されていきました。

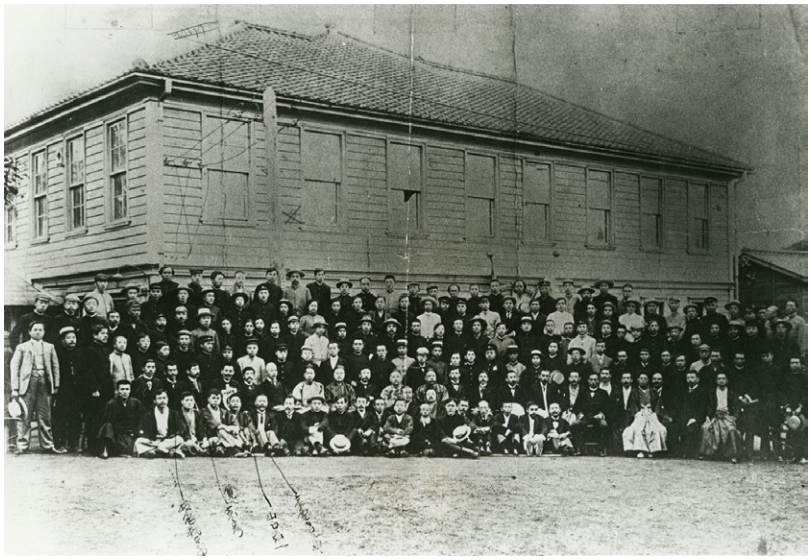
現在、目白通り沿いの飯田橋駅から九段下交差点の間（「飯田橋散歩路」）にはこれらの学校の「発祥の地」碑が多数建てられています。



「麹町区九段上」（鳥瞰図。『風俗画報 東京名所図会』より。江戸東京研究センター所蔵）

5. 清国留学生と飯田町・神楽坂

九段･飯田町地区では、1896（明治 29）年に弘文学院（嘉納治五郎が設置した清国人向け日本語学校）が、1906（明治 39）年に法政大学清国留学生法政速成科の寄宿舎が設置され（現在の日本歯科大学生命歯学部付近）、中国人留学生や亡命革命家たちがこの地域を根城とすることになります。神楽坂の中華料理店「鳳楽園」や飯田町にあった割烹「富士見楼」などが彼らの集会場でした。



清国留学生法政速成科卒業式（1906 年）

1905（明治 38）年 8 月、法政大学に在籍していた宋教仁、陳天華など革命派の留学生たちは、宮崎滔天、内田良平らアジア主義者の助力を得ながら、富士見楼で革命派のリーダーであった孫文の歓迎会を開催しました。歓迎会では孫文による演説（「中国応建設共和国」）がなされ、東京ではじめて公の場に現れた孫文を一目見ようと、数百名の人々が駆けつけ、大騒ぎとなりました。

6.「アルバイト」としての人力車夫 ―卒業生三條商太郎の回想―

1902（明治 35）年に和仏法律学校を卒業した三條商太郎は在学当時の学生たちの生活を回想するなかで次のように述べています（三條商太郎「今昔物語」）。「此の時代に最も幅をきかしたものは、人力車であった。…此の当時の苦学生は夜な夜な之を業としたものが有つた、今は新聞配達で苦学する人が多いが此の当時は新聞を読む家は多くなかつた故新聞配達は容易でなかつた…大抵此の苦学生は、地方出の人なのですから、東京の地理に暗く、乗客は甚だ困る事があるのです」。

この回想にあるように、東京中に人力車が走っていた時代、地方から上京してきた学生たちにとって、学資や生活費を手っ取り早く稼ぐには、人力車夫が格好の「アルバイト」だったようです。

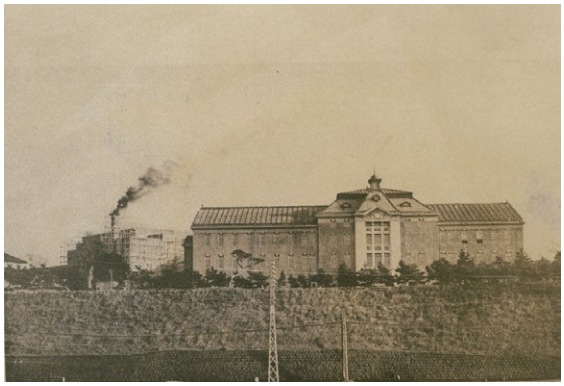
急勾配だった九段坂では人力車を押す姿が見られた（『風俗画報 東京名所図会』より。江戸東京研究センター所蔵）

第3章
法政大学の大学昇格と「大東京」の形成

1．大学昇格と富士見校地の開設

1920（大正9）年、法政大学は法律学校から大学へと昇格し、翌年、甲州財閥の重鎮で校友の神戸挙一や後の内閣総理大臣若槻礼次郎らの助力を得て、富士見校地（現在の市ケ谷キャンパス）に新たな校舎を竣工し、以後、同地は法政大学の発展の拠点となりました。

富士見校地の敷地は済生会病院と軍医学校に隣接し、赤煉瓦塀で囲まれた広場であり、もとは熱湯療養所、明治義会中学校があった場所です。富士見町は、江戸時代には旗本屋敷が密集していましたが、明治に入ってから、陸軍関係や医学関係の施設が相次いで建設されました。



第一校舎と建設中の第三校舎

1921（大正10）年に第一校舎が建てられた後、関東大震災で大きな被害を受けることもなく、第二校舎（1922年）、第三校舎（1927年）、第四校舎（1928年）、新館（1930年）と、次々と校舎が建てられていきました。

校舎屋上から見た外濠沿いの風景

2. 拡張する東京

大学昇格の背景には第一次大戦以降の好景気がありました。企業の大規模化が進捗し、東京を中心とした都市には、「ホワイトカラー」、「サラリーマン」が誕生し、実業界では、大学などの高等教育機関において、知的なトレーニングを積んだ優秀な人材が求められていました。

また、彼らホワイトカラーは公務員などとともに「新中間層」（自作農・商店主といった旧中間層と対比される階層）と呼ばれ、そうした新中間層は自らの子弟についても高等教育を受けることを望んでいたため、潜在的・将来的な大学入学志望者も見込まれたのです。

さらには、こうした新中間層の拡大は、彼らが寝起きする場所としての「郊外」（田園都市）の形成にもつながっていきました。とりわけ、関東大震災以降の「帝都復興」の過程では、鉄道網・交通網が拡張され、都市としての「東京」の範囲が広がっていきます。

『大東京交通機関網図』（1932 年。公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所市政専門図書館所蔵）

震災から復興を果たした銀座（法政大学卒業アルバム、1929 年）

3. 中野（新井薬師）の運動場と吉祥寺の法政寮・満州学生寮

東京の都市化の進展と郊外の形成が進むなか、法政大学も東京およびその周辺地域に新たな大学施設を設置していきました。中野（新井薬師）の運動場、吉祥寺の学生寮（法政寮）や満州学生寮などが最初期のもので、いずれも中央線沿線に位置していました。

中野の運動場は野球部の要請に応えて、1919（大正 8）年に設置されました。1927（昭和 2）年には、西武電鉄が新井薬師駅を設置したことによって、交通の便がよくなり、大学の運動会も開催されるようになりました。

甲武鉄道（後の中央線）が吉祥寺駅を設置したのは 1899（明治 32）年のことです。1917（大正 6）年には井の頭公園が開園し、関東大震災以降は、震災で焼け出された人々が次々に移住し、市街地として成長していきました。1933（昭和 8）年には帝都電鉄井之頭公園駅が開通し、翌年に吉祥寺駅も開業しました。学生寮（法政寮）が設置されたのも同年のこと、1937（昭和 12）年には満州からの留学生のため、満州学生寮が設置されました。

中野運動場での運動会（1925 年）

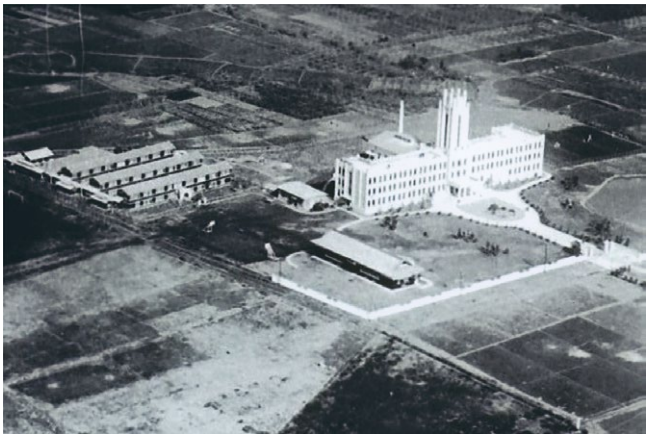
満州学生寮

4. 東京横浜電鉄の開業と木月校地の開発

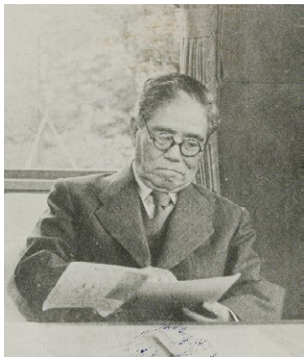
1936（昭和 11）年、法政大学は川崎木月の広大な土地に予科を移転し、大運動場も建設しました。同地が選ばれたのは、東京横浜電鉄（現：東急東横線）の開業（1926 年）があり、ほかならぬ東京横浜電鉄の創業者五島慶太が敷地 1 万坪を寄付することを法政側に申し出たといいます。五島は法政大学の最古参の教員であった法学者富井政章の元書生であり、1920 年代には渋沢栄一らの「田園都市計画」に参画し、1934（昭和 9）年に慶應義塾大学予科の日吉移転を推進したことでも知られています。

また、大学側としては、「予科騒動」が頻発していた時代の中で、都市の喧騒から逃れた自然が豊かな地において、教育活動を行いたいという意図がありました。他大学でも日本医科大学予科が新丸子に（1932 年）、明治大学予科が和泉に（1934 年）、日本大学予科の下高井戸に（1938 年）移転しています。

現在、法政大学第二中・高等学校の所在地である木月校地の開発は、戦後における小金井、多摩の両キャンパスの開設の先駆けとなったのです。



木月校地（終戦直後）



五島慶太（1882-1959）
＊国立国会図書館「近代日本人の肖像」より

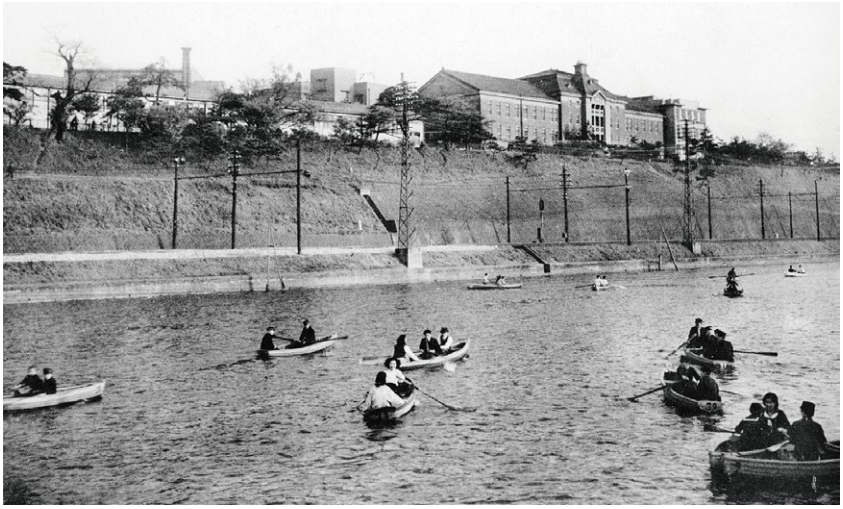
第4章
大学昇格時の教員陣と「法政ボーイ」たち

1. 法政大学の大学昇格

第一次世界大戦後の好景気を受けて、日本の高等教育は大きな変貌を遂げることとなりました。好景気による都市化の進展と市民層の拡大は高等教育を望む声を高め、1918（大正7）年、これまで帝国大学（現在の東京大学・京都大学など）だけに限られていた「大学」という名称が、私立やその他官公立の学校にも認められることが決定し、私立大学を中心に数多くの「大学」が誕生しました（「大学令」1918年12月6日勅令第388号）。

これまで、「大学」を名乗ることを認められていた法政大学も、1920（大正9）年7月、大学令による認可を受け、従来の法律学及び政治学の専門学校から脱皮し、外国語などの教養教育、そして、経済学、文学、哲学など様々な学問領域を教え・研究する、名実ともに正式な「大学」へと昇格したのです。

大学昇格後、松室致学長や野上豊一郎予科長のもと、夏目漱石門下の作家・文学者や京都学派の哲学者たち、東京帝国大学の学生団体新人会出身の経済学者たちが教員に就任し、後に「自由と進歩」と言われる法政大学の学風の基礎が築かれました。



大学昇格翌年に開設した富士見校地（現在の市ケ谷キャンパス）＊写真は1940年頃

2. 初代学長松室致

松室致は法政大学の大学昇格を成し遂げ、現在に連なる総合大学としての発展の礎を築いた初代学長です。

1852（嘉永 5）年、小倉藩（福岡県北九州市）の藩士の家に生まれた松室は、司法省法学校でフランス法を学びます。卒業後は司法官として経歴を重ね、検事総長時代には大逆事件に対峙し、司法大臣も 2 度務めました。その傍ら、法政大学の前身である東京法学校･和仏法律学校の教員を務め、1913（大正 2）年、専門学校令下の学長に就任しました。

大学令が公布されると、松室学長自ら資金集めに奔走し、富士見校地（現在の市ケ谷キャンパス）の開発を進めるとともに、教員体制や学校組織の整備を図り、大学昇格を成し遂げました。一方、人事に関しては絶大な信頼を置いていた野上予科長や経済学者の高木友三郎らに任せ、教授会の決定や教員個々人の思想・学問内容に関与することはなかったといいます。

1928（昭和 3）年、松室は教職員と学生を中心とした理想的な教育と共同生活の場を求め、北軽井沢の広大な土地に「法政大学村」（現：北軽井沢大学村）を建設し、安倍能成や谷川徹三ら教職員のほか、岩波茂雄（岩波書店創業者）など学外からも多くの学者・芸術家が集いました。

松室致（1852-1931）

第一校舎に掲げられた松室筆の「法政大学」

松室致着用の大礼服および正帽

九段上校舎前に集まる法政大学の卒業生たち、2 列目に松室致や富井政章ら教員が並ぶ（1915 年）

書道家であり梅を好んで描いた松室致の詩画、号は謙齋（1925 年）

3. 予科長野上豊一郎の活躍

現在の大分県臼杵市に生まれた野上豊一郎は夏目漱石に学んだ英文学者で、後年は能楽研究の第一人者として活躍しました。法政大学に着任すると、大学昇格期には予科長、戦後は学長・総長として、大学の発展に尽力します。

1920（大正 9）年、大学昇格と同時に予科長に就任した野上は、松室学長の片腕として教育体制の充実に努め、文学者の内田百閒や森田草平、小宮豊隆、井本（青木）健作、哲学者の和辻哲郎など、漱石門下を中心に時代をリードする俊英を予科の教員として招へいし、法政独自の自由な雰囲気の教授室を作り上げました。しかし、松室学長が急逝したのち、1933（昭和 8）年に野上の人事方針や大学経営の問題が焦点となり「法政騒動」が勃発し、野上は一時期辞職を余儀なくされます。

終戦直後に学長（のち総長）に就任した野上は、戦時中の教育を一新、美濃部達吉・高野岩三郎・市河三喜などリベラルな人材を結集し、「自由と進歩」の学風の礎を築きます。

野上は創立 70 周年を見届けた翌 1950 年、総長在任中に逝去。1952 年に野上の功績を記念して「野上記念法政大学能楽研究所」が設置された際には、妻で作家の野上弥生子が顧問を務めました。

野上豊一郎（1883-1950）

野上夫妻（両端）と谷川俊太郎（中央右）

創立 70 周年を記念して野上が描いた色紙「葛城」と「大同無少長」の揮毫入り扇子（1949 年、野上記念法政大学能楽研究所所蔵）

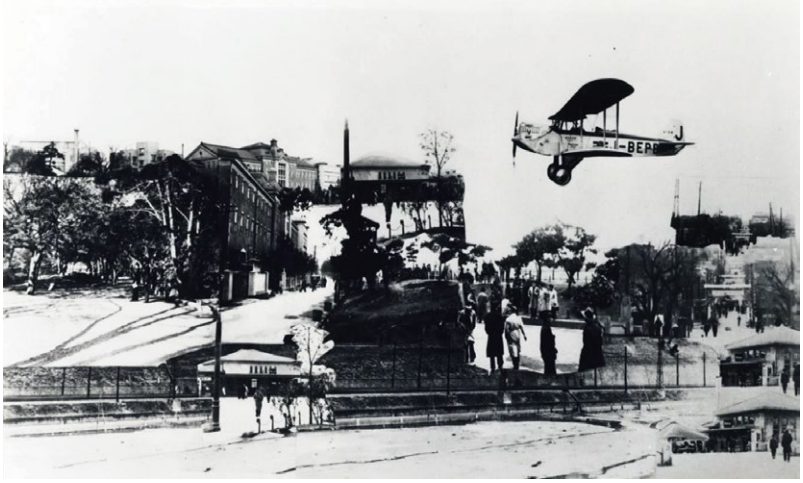
野上家に伝わる夏目漱石のデスマスク、彫刻家・新海竹太郎制作（1966 年、野上記念法政大学能楽研究所所蔵）

法政大学勤続 25 年を記念し、野上に贈られた銀時計（1948・1949 年、野上記念法政大学能楽研究所所蔵）

4. 学生文化の開花

大学に昇格したことは法政大学に様々な変化をもたらしました。その一つとして、修業（授業）時間が一変したことにより、学生の特性やキャンパスライフが大きく変化したことが挙げられます。

専門学校時代は夜学（夜間授業）が中心であり、昼間に何らかの職業をもち、夕方から学校に通う学生たちが中心でしたが、大学昇格後は昼間の授業が中心となったため、従来の勤労学生が減少し、フルタイムの学生（大学生）が中心となりました（天野郁夫『大学の誕生』）。彼らは授業後の「放課後」の時間があったため、その時間を使って、様々な活動を開始しました。スポーツや音楽、演劇など部活動やサークル活動が活発化し、現存する多くの体育会や文化団体がこの時期に多数誕生しました。



外濠、神楽坂、市ケ谷・飯田橋駅、航空機など昭和初期の法政大学の学生生活を象徴する事物を散りばめたコラージュ

また、法政大学が大学に昇格した際には、早稲田大学、慶應義塾大学、明治大学、立教大学など他の私立大学も一斉に大学へと昇格したため、六大学野球など大学間スポーツの対抗戦やリーグ戦が活発化するとともに、他大学と法政大学の違いを探究し、法政大学の個性を自分たちでつくっていこうとする「法政スピル（法政精神）」運動が展開されるようになりました。

5.「法政ボーイ」の時代

大学昇格後、法政大学では第一校舎などモダンな校舎が相次いで建設され、また、関東大震災による被災を免れたことや新進気鋭の教員陣がジャーナリズムの場でも活躍していたことから、キャンパス周辺の富裕層の子弟が多数入学し、彼らは法政版の「モボ」（モダンボーイ）であるところの「法政ボーイ」と呼ばれていました。

当時の新聞報道によると、「明治十三年、早くもフランス人二名を教授に招聘して以来、今も伝はるフランス風のハイカラさ――フレッシュでサッパリした処が、かうした階級の気に入られたのだらう。従つて、学生は可なり濃厚なカレツジボーイの気分を備へてゐる」と記されています（「学園展望　法政の巻【1】　雨風いとはぬ学長の精励振り　学生にはモボが幅を効かす　法律学校の草分け」『読売新聞』1928 年 4 月 10 日）。

大正末から昭和初期にかけて、彼ら「法政ボーイ」はキャンパス周辺の神楽坂や飯田橋などを拠点として華やかな学生文化を形作っていきました。

校舎前での集合写真（1925 年）

市電新見附停車場
（法政大学前。1935 年）

6. 神楽坂・外濠と法政大学の学生たち

「法政ボーイ」たちが根城としたのが、神楽坂でした。

神楽坂は関東大震災の被災を免れたことから、カフェや飲食店、映画館、ビリヤード場、三越など老舗デパートの支店が立ち並び、盛り場としてより一層発展しました。

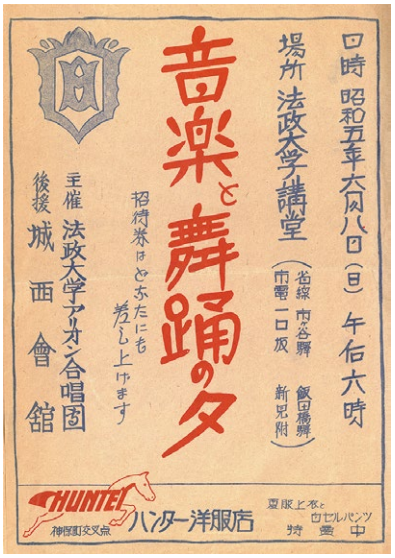
元々、神楽坂は早稲田大学の学生の「勢力範囲」でしたが、1930（昭和5）年、法政大学創立50年祭挙行に際して「祝法政大学創立五十年記念」の大アーチが坂の上下に掲げられたことから、法政の影響力が強くなり、同年には東京六大学野球リーグにおいて野球部が初優勝を飾り、その優勝パレード（提灯行列）が神楽坂で行われたことも重なり、「完全に法政街」になったといいます（「校友を語る－牛込の巻」）。

一方、法政大学の前を流れる外濠の土手も学生たちの憩いの場でした。江戸城の外周をなす外濠の土手は形式的には軍事施設の扱いだったため、立ち入りが禁じられていました。しかし、禁を破って土手に入り込む学生が後を絶たず、法政大学は当時の東京市に対し、外濠の土手開放を要請しました。その結果、1927（昭和2）年に外濠公園として開放されることが決定しました。

神楽坂に居並ぶ法政大学学生（1932年）

日本青年館ホールで開催された音楽部の公演パンフレット（戦前）

ドイツ語劇「アルト・ハイデルベルク」公演のポスター。学生によるドイツ語劇は1921年の『ファウスト』上演後、長年続けられた。



法政大学アリオン合唱団主催「音楽と舞踊の夕」（1930年）

『法政大学新聞』（試輯）第1号（1928年）

第5章
戦後法政大学の歩みと3キャンパス時代の幕開け

1. 市ケ谷キャンパスの再建と53・55・58年館の竣工

1945年5月、山の手大空襲により、法政大学は多大な被害を受けました。富士見校地（現在の市ケ谷キャンパス）の被災率は55%と、他大学と比較しても酷い状況でした。

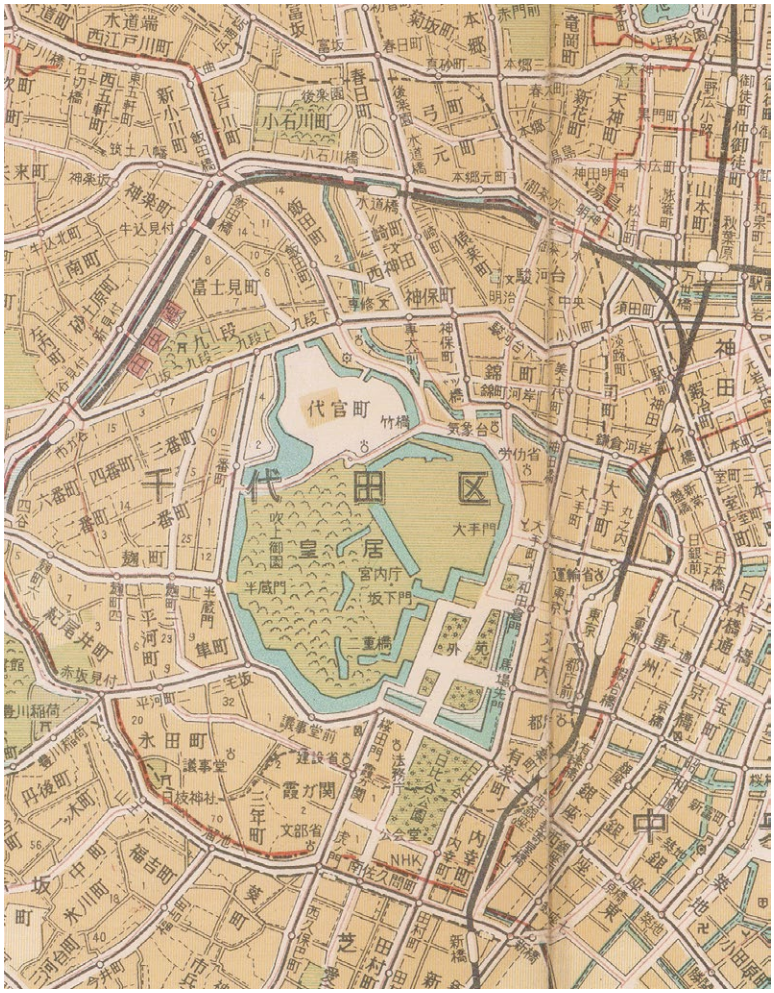
終戦後、市民主義的・民主主義的な理念を掲げた、野上豊一郎、大内兵衛、両総長のもと、法政大学は戦後復興が成し遂げられていきました。富士見校地では、占領期における建築制限（1946年施行1947年廃止「臨時建築制限令」、1947年施行1950年廃止「臨時建築等制限規則」）が解除されてまもなく、大江宏工学部教授の設計による53年館（旧大学院棟）が竣工されます。53年館は市ケ谷界隈では戦後初の鉄筋の高層建築であり、そのモダニズム様式とともに話題を呼び、地域のランドマーク的な存在となりました。そして、53年館に続いて建設された、55・58年館は「日本有数のモダニズム建築」として高い評価を得、戦後の法政大学を象徴する校舎となります。

53・55・58年館

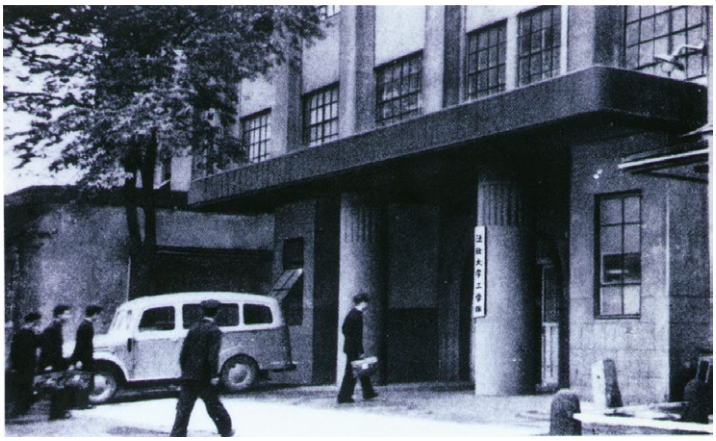
2. 3キャンパス時代の幕開け

53・55・58年館の建設が行われた大内兵衛総長時代には、高度成長期に膨張した学生数を収容するために、市ケ谷キャンパス内において校舎の新築・増築を繰り返し、1952年には社会学部の前身である中央労働学園大学の旧校舎を活用し、麻布校舎（現在の南麻布2丁目）を設置します。

しかし、大内総長が退任した1959年、「工場等制限法」が施行され、東京23区を中心とした都心部において、大学の新設増設などが制限されるようになり、近畿圏でも1964年から同法が施行されるようになりました（同法は2002年に廃止）。そのため、法政大学は東京西部の郊外地に土地を求めて、1964年に小金井キャンパス、その20年後の1984年に多摩キャンパスを開設し、現在も続く法政大学の3キャンパス時代が幕を開けることとなりました。



1950年代後半の法政大学周辺（『大東京精図』日地出版、1958年）



麻布校舎

3. 小金井キャンパスの開設

小金井キャンパス開設のきっかけとなったのは、1964 年の国鉄（現：JR）中央線の東小金井駅の開業です。当時の小金井市は高度成長期において、東京都心部のベッドタウンとして成長していく過程にあり、東小金井駅は全額地元住民負担で設置された日本初の請願駅として出発しました。

また、当時の鈴木誠一小金井市長（市制施行後の初代市長）が「小金井を学園的住宅都市として発達を希求して施設経営に意を注」いだ人物であったことも見逃すことができません（1958 年 10 月小金井市報の記事より）。すでに小金井では、東京学芸大学、慶應義塾大学工学部、東京農工大学がキャンパスを構えており、法政大学の工学部移転によって、「学園的住宅都市」としてのより一層の充実が期待されていたのです。

現在、小金井キャンパスでは、理工学部・情報科学部・生命科学部の理系 3 学部が設置されています。

竣工時の小金井キャンパス（1964 年）

4. 多摩キャンパスの開設

多摩キャンパスは小金井キャンパスの開設と同年、1964 年から用地の取得が開始されました。マスプロ教育からの脱却を目指していた谷川徹三総長（当時）は、新キャンパス用地を求めて、栢野晴夫常務理事（社会学部教授）をその任に当たらせ、栢野理事は社会学部・経済学部教員が戦後初期から農村調査を行っていた町田市と八王子市にまたがる広大な土地を新キャンパスの用地として見出しました。

しかし、大学紛争期を挟んだために、利活用計画の検討がしばらく進捗せず、ようやく検討が開始されたのは、1974 年のことでした。この間には、「新都市計画法」（1968 年）、「東京における自然の保護と回復に関する条例」（1972 年）が施行され、開設計画は変更を余儀なくされましたが、これらの制約は自然環境と調和した緑豊かなキャンパスの形成へとつながりました。

竣工時の多摩キャンパス（1984 年）

増補

1 「腕力世界」から「法律世界」へ
ー東京法学社の創立ー

私立法律学校が集う明治時代の神田区

東京市神田区全図 拾五区之内第二（1900 年）/ 参考：展示パンフレット「近代日本の幕開けと私立法律学校ー神田学生街と法典論争ー」（2014 年）

①日本大学広報部広報課提供
日本大学の歴史はこちら→

②獨協学園史資料センター提供
獨協大学の歴史はこちら→

③専修大学大学史資料室提供
専修大学の歴史はこちら→

④明治大学史資料センター提供
明治大学の歴史はこちら→

⑤中央大学広報室大学史資料課提供
中央大学の歴史はこちら→

東京法学社の創立

薩埵（さった）正邦、伊藤修、金丸鉄の 3 名によって、法政大学の起源である東京法学社が設立されたのは 1880（明治 13）年 4 月のことです。薩埵は京都、伊藤・金丸は杵築藩（現在の大分県杵築市）の出身で、彼ら 20 代の若者たちは最先端の知を求めて、郷里から上京しました。

明治維新後、政府は江戸を東京へと改称、日本の首都と位置づけ（東京奠都）、「郭内」（江戸城外濠の内側）に政府の機関を次々と設置し、周囲の旧武家地区には、様々な学校が設立されるようになります。

1871 年には、司法省の設置に伴い、現在の千代田区霞が関に司法省明法寮が設立され、官による法学教育が開始されました。しかし、その教育対象者が極めて限られていたことから、司法官やボアソナードらお雇い外国人、そして、代言人（現在の弁護士）や民権家などの都市の知識人層が中心となって、私的にも法学教育が行われるようになります。こうして、時代の学問である最先端の法学知を求めて、有為なる若者たちが東京に集うようになったのです。

明治改正東京全図（1887 年）

薩埵正邦
（1856-1897）

伊藤修
（1855-1920）

金丸鉄
（1852-1909）

神田地区の法律学校

「神田と云えば、直ぐ学生を聯（れん）想する」「銀座が紳士の街なら、神保町通りは学生の街だ」（谷崎精二「神保町辺」『大東京繁盛記　山手編』1927 年）といわれるように、神田地区は古くからの学生街として知られています。

神田学生街は明治初頭、同地区に多くの学校が設立されたことから始まりました。草創期の法政大学は駿河台や錦町など神田地区の旧武家屋敷を転々とし、授業を行っていました。幕府の崩壊によって、この地に屋敷を構えていた武家たちが国元に帰るなどし、多くの空き家があったためです。

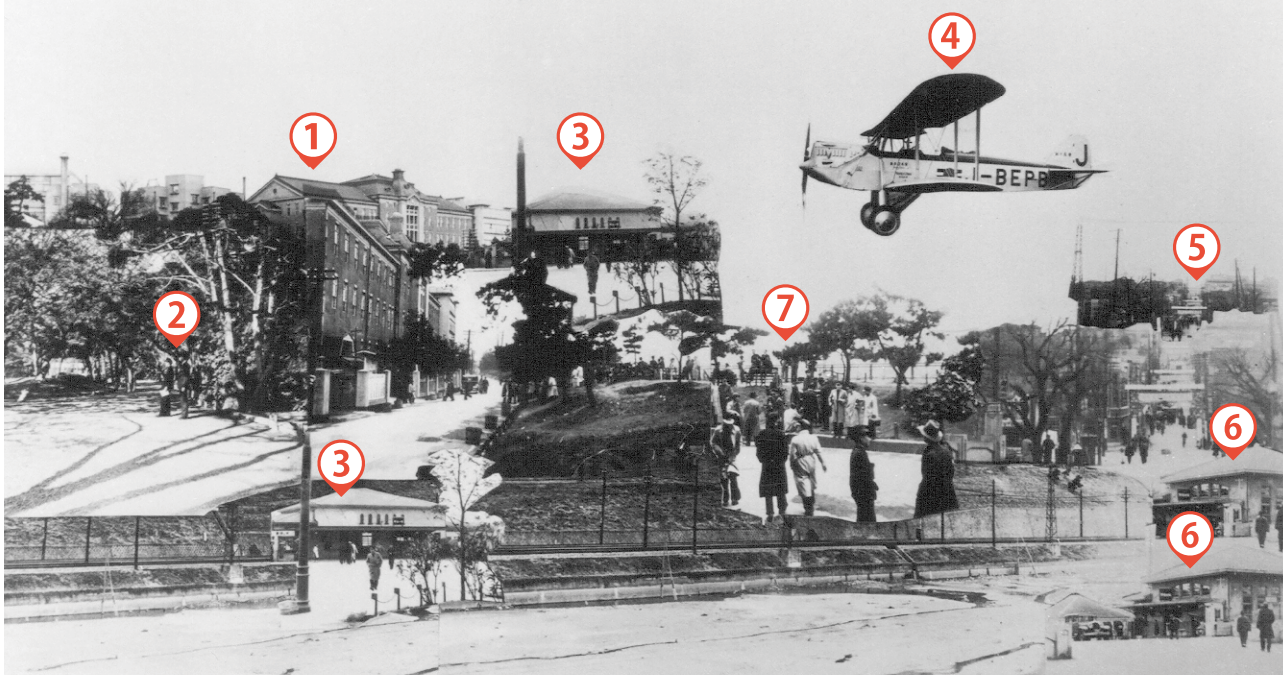
同時期には、専修学校（現：専修大学）、明治法律学校（現：明治大学）、英吉利法律学校（現：中央大学）、日本法律学校（現：日本大学）などの私立法律学校が神田地区に相次いで設立（もしくは移転）され、東京でも有数の下宿が多い街になりました。東京で最初の活動写真（映画）が上映されたのも神田区錦町にあった錦輝館です。関東大震災で多大な被害を受けながらも、より多くの学生たちが集う街となり、「学校と古本屋」（谷崎）で知られる、日本を代表する学生街が形成されていったのです。

神保町界隈（1930 年代）

ニコライ堂から見た小川町校舎（オレンジ枠で囲まれている建物が東京法学校及び東京仏学校校舎）

2 「自由と進歩」の精神
ー法政大学における学風の形成ー

1920年代～1930年代初頭の法政大学とその学生生活



法政大学卒業アルバムより（1932 年）

① 大学昇格と市ケ谷キャンパスの形成

1920（大正 9）年、法政大学は法律学校から大学へと昇格し、翌年、甲州財閥の重鎮で校友の神戸挙一や後の内閣総理大臣若槻礼次郎らの助力を得て、富士見校地（現在の市ケ谷キャンパス）に新たな校舎を竣工。同地は法政大学の発展の拠点となります。

富士見校地の敷地は済生会病院と軍医学校に隣接し、もとは熱湯療養所、明治義会中学校があった場所です。富士見町は、江戸時代には旗本屋敷が密集していましたが、明治に入ってから、陸軍関係や医学関係の施設が相次いで建設されました。

② 大学昇格後の教員と学生

大学となった法政大学では、フランス法を学んだ司法官僚である初代学長・松室致のもと、夏目漱石門下の文学者や京都学派の哲学者たち、東京帝国大学の学生団体新人会出身の経済学者たちが教員に就任し、後に「自由と進歩」と言われる法政大学の学風の基礎が築かれました。

また、大学昇格とともに、昼間の授業が中心になったことから、放課後の時間ができ、学生の間に様々な文化・スポーツ活動が生まれ、その活動は今に続いています。

外濠にそびえる第一校舎（1935 年）

校内売店（1938 年）

野上豊一郎（1883-1950）

松室致（1852-1931）

ⓐ 森永 カレッヂチョコレート

昭和初期、東京6大学野球リーグが国民的な人気を誇るようになり、森永製菓から6大学各校の校名を入れた「カレッヂチョコレート」が販売。ラベルの裏面には各校の校歌が印刷されていたそうです。

森永カレッヂチョコレート（法政大学）

③ 市ケ谷駅

市ケ谷駅は 1895 年、JR 中央線の前身である甲武鉄道により、設置されました。法政大学の前身の和仏法律学校が 1890 年に神田から九段へ移転して以来、法政大学と市ケ谷駅は 120 年以上の長い「付き合い」があります。

路面電車（市電）が走っていた頃の市ケ谷駅（1935 年）

④ 青年日本号

1929 年、予科教授で随筆家として知られる内田百閒（栄造）を会長に法政大学航空研究会が設立。1931 年、同研究会では東京－ローマ間の学生訪欧飛行（搭乗機：青年日本号）を成功させ、大きな話題を呼びました。

内田百閒
（1889-1971）

ローマに到着した青年日本号
（1931 年）

⑤ 神楽坂

戦前期から法政大学の学生たちが根城としたのが、神楽坂でした。神楽坂は関東大震災の被災を免れたことから、カフェや飲食店、映画館、ビリヤード場、三越など老舗デパートの支店が立ち並び、盛り場として震災後は一層発展しました。

神楽坂通り
（1926 年）

神楽坂に居並ぶ法政大学学生
（1932 年）

⑥ 飯田橋駅

JR 中央線の前身である甲武鉄道が設置し、駅間の距離が近接していた牛込駅（1894 年開業）と飯田町駅（1895 年開業）が合併し、1928 年、飯田橋駅が開業しました。

飯田橋駅の学生
（1935 年）

⑦ 外濠

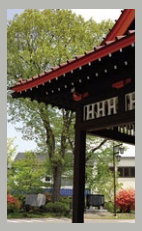
法政大学の前を流れる外濠の土手は戦前から学生たちの憩いの場でした。

江戸城の外周をなす外濠の土手は形式的には軍事施設の扱いだったため、立ち入りが禁じられていました。しかし、禁を破って土手に入り込む学生が後を絶たず、学生の要望もあり、大学が当時の東京市に対し、外濠の土手開放を要請。その結果、1927 年に外濠公園として開放されることが決定しました。

外濠で佇む学生
（1941 年）

ⓑ 法政大学村

1928 年、松室致学長は教職員と学生を中心とした理想的な教育と共同生活の場を求め、群馬県北軽井沢の広大な土地に「法政大学村」を建設し、法政大学の教職員のほか、岩波書店の関係者など学内外から多くの学者・芸術家が集いました。



北軽井沢駅舎（欄干に法政の「H」）

法政大学村の野上豊一郎夫妻と谷川多喜子・俊太郎親子

ⓒ 法政寮

東京の都市化の進展と郊外の形成が進むなか、法政大学も東京およびその周辺地域に新たな大学施設を設置していきました。中野（新井薬師）の運動場、吉祥寺の学生寮（法政寮）や満洲からの留学生のための寮などが最初期のもので、いずれも中央線沿線に位置していました。

法政寮
（川崎校地時代）

ⓓ 川崎予科校舎

1936 年、法政大学は川崎木月の広大な土地に予科を移転し、大運動場も建設しました。同地が選ばれたのは、東京横浜電鉄（現：東急東横線）の開業（1926 年）があり、ほかならぬ東京横浜電鉄の創業者五島慶太が敷地を寄付することを法政側に申し出たといいます。

川崎校地は戦後における小金井、多摩の両キャンパスの開設の先駆けとなりました。

竣工時の予科校舎（1936 年）

展示解説 HOSEI ミュージアム 2023 年度特別展示
「都市と大学ー法政大学から東京を視る〈増補改訂版〉」

2021 年 3 月 8 日初版発行
2023 年 9 月 1 日増補改訂版発行

編集・発行　HOSEI ミュージアム
〒 102-0073　東京都千代田区九段北 3-2-8（事務室）
TEL 03-3264-6501　　FAX 03-3264-6504
https://museum.hosei.ac.jp/

印刷　株式会社 エス・クリエイティヴ
〒 302-0109　茨城県守谷市本町 3169 － 1
TEL 0297-45-0226